

では、世俗的な人たちの間でヘルツルのシオニズム運動の評判は良かったのか？

これがまたね、総スカン食らったんですよ。ユダヤ人、特に成功したヨーロッパのユダヤ人は、自分のユダヤ性を隠すことで成功してるんです。ヨーロッパの文化に順応し、ヨーロッパに貢献し、ヨーロッパ人であるかのように振る舞うことによって、成功者のポジションを獲得したんですね。

そんな時に、ユダヤ人の国を造るという運動に関わることは、「おまえ、ヨーロッパに対する忠誠心、どうなの？ おまえの忠誠心、二重なの？」と、あらぬ疑いを掛けられることになります。

彼らにとって、今までの地位を失いかねないような危険をはらむシオニズム運動というのは「迷惑！やめてくれや。やめろや。大人しゅうしとれや。」そんな感じですよ。

宗教的な人々からも世俗的な人々からも反発を食らう中、少数派の熱血シオニスト・ユダヤ人たちがいました。政治的シオニストと言います。彼らがヘルツルが導く“ふるさとに帰ってユダヤ人の国を造っていくんだ”という運動に身を投じたんですね。そして、それぞれ自分ができることをします。

あるユダヤ人は国家建設のために献金し、財政支援で貢献しようとしていました。

あるユダヤ人たちは実際にオスマン帝国下のパレスチナに行き、土地開墾のために移住・入植しました。

あるユダヤ人は、「ユダヤ人の国ができた時 共通の国語を持つべきだ。それは先祖が話していたヘブライ語であるべきだ。」ヘブライ語の復活に生涯を献げました。

それぞれが自分にできる、自分に与えられている能力を発揮して、ユダヤ人の国造りのためにゼロからスタートしていったのです。

オスマン帝国はユダヤ人入植に辛く当たりました。理解がなかった。正当な許可を得て、不動産売買で造っていった入植村に対しても、踏み潰すような勢いで弾圧した。

それを何とか抑えるために、ヘルツルにはヘルツルの出来ることがありました。それは、ヨーロッパの首脳に会って直談判し、支援してもらうことです。ところが、どこの首相も口では良いことを言うけど、実際に行動してくれない。断られ断られ、失望の連続。

しかし遂に、シオニズムに同情的な天下の大国、当時世界で最も強力な国が、手を貸そうと言ってヘルツルの前に現れました。どこでしょう？ 大英帝国です。世界7つの海を支配する大英帝国。

大英帝国に24時間 陽は沈まないというイギリスが、シオニズムに対して非常に同情的になったんです。

1902年7月、移民制限のための調査委員会があって、難民の専門家としてヘルツルが呼ばれました。

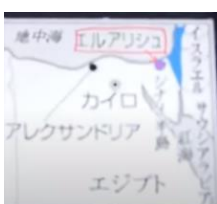
ロシアのボグロムを始め 色んな所でユダヤ人の迫害があったので、ユダヤ難民がヨーロッパを徘徊して、サッカーボールみたいにあっちで蹴られ、こっちで蹴られ…。

この難民問題 何とかせなあかんということで、イギリスは頭抱えてたんですね。

それで、解決策はないのか意見を聞くためにヘルツルを呼んだ。ヘルツルは「ユダヤ人たちを受け入れる受け皿の土地を準備して、そこに入植させるのが一番シンプルな解決だと思います。我々が主張しているシオニズムとはこれなんです！」と訴えました。

同年秋、ヘルツルはビッグチャンスを手に入れました。その時のイギリスの内閣で、総理大臣に次ぐ実力者ジョゼフ・チェンバレン（植民地大臣）がシオニズムに理解を示したのです。

それが分かった時、ヘルツルはチャンスだと思ったんですね。



当時、イギリスとエジプトは同盟条約を結んでいました。アングロ・エジプト条約という同盟関係にあったんです。イギリスとエジプトが共同で管理する土地がいくつかあったのですが、その1つにシナイ半島地中海沿岸のエルアリシユがあります。

シナイ半島は南に行けば行くほどゴツゴツした岩山で、モーセがトーラー（モーセ五書）をもらったシナイ山があります。しかし、海岸のほうに行くと砂漠になるんです。見渡す限り岩場と砂漠しかないような所ですが、エルアリシュには泉が湧いているんです。真水がある。水源地があるんですね。なので、今では風光明媚な避暑地・観光地になってます。私も何回か行きました。

ヘルツルはエルアリシュの共同管理者の1つであるイギリスに対して、「ここにユダヤ人の集結地を造ってくださいますか」と提案するんです。なぜなら、エルアリシュを含むシナイ半島も、神がアブラハムに与えた約束の地の範囲に入っているんです。エルアリシュからエルサレムはずいぶん遠いですよ。でも、エルアリシュを含むシナイ半島も約束の地の一部。すなわち、ここもシオンなんです。

シオンの中心地はエルサレム。エルサレムからはほど遠い。しかし、シナイ半島もシオンの地。そこに帰るのはシオニズム運動の理想と合致するんですね。「ここを集結地にしてください！」そしたら、チェンバレンが「エジプトに言うてみるわ！」言うてね、動いてくれました。

結論を言うと、エジプトは断ったんです。「なんでユダヤ人のために、ここをあげなあかんねん。ここに住ませてやらなあかんねん。」協力してくれなかったので、この話は立ち消え。一件落着。おしまい。

ですがその後、より重要な提案がイギリス政府からなされたんです。チェンバレンは植民地大臣なので色々な植民地を巡回視察します。アフリカの植民地を回り、ウガンダに入って見た時に「これ いけるんじゃない?! ユダヤ人入植地として ここはいけるんじゃない?!」と思いつくのです。

というのは、沿岸地方は暑くてとても過ごせないけれど、内陸部は非常に涼しくて過ごしやすい。ヨーロッパ人にも素晴らしい環境。それは、長年ヨーロッパに住んでいるユダヤ人も過ごしやすいということです。何よりも、気候的にここでは砂糖、綿花栽培ができることが分かった。つまり、すぐに金になる農業が展開できる。経済的な自立って、すごい大事でしょ。過ごしやすいわ、金になる農業展開できるわ、ここ、いけるんじゃない?!

このチェンバレンの思いつきは、すぐに正式なイギリス外務大臣の提案となったんですね。どんな提案でしょう。“ウガンダの管轄統治権はイギリスが握る。しかし、行政長官はユダヤ人に任せようじゃないか。そして、宗教関係と民事のジャンルは彼らに自治を任せようじゃないか。それ以外のことはイギリスが統治する。宗教関係と民事分野はユダヤ人がユダヤ人を統治して、彼らが住みやすく生活しやすい環境を提供しようじゃないか。”

イギリス政府のほうから動いてくれたんですよ。今までね、こんなにユダヤ人のために親身になって考えてくれる国って無かった。もうこれは千載一遇のチャンスです。しかし、その提案をチェンバレンから聞いたヘルツルはジレンマを抱えます。それは深刻な葛藤ですよ。

ウガンダはシオンじゃない。ウガンダとユダヤ人は関係がない。ウガンダは聖書の土地じゃない。シオンに帰るのがシオニズムの理想なのに、「シオンと関係ないウガンダに入植しよう」なんてシオニストに言ったら、どんな反応するだろう。

しかし同時にこの時、ロシアが恐るべき大迫害をユダヤ人に加えていたのです。おびたしいユダヤ人たちが迫害され虐殺され、ヨーロッパ中で酷い目に遭っている

そこでヘルツルは考えたんですね。「ウガンダに永久に住むんじゃなくて、一時的な避難場所として一旦ウガンダに移住し、やがてシオンに行こう。シオンという最終ゴールに行くために、一時的避難場所としてウガンダに行くんだったらオッケーじゃないか。」

そして 1903 年 第 6 回シオニスト会議に出て、思い切ってこの問題について口を開きました。
「諸君。ウガンダはシオンではない。ウガンダはシオンになり得ない。しかし…」

1903 年はロシア史上最大のポグロムがあった年です。今こうしている間も、たくさんのユダヤ人が次々命を落としている。彼らを一時的に避難させる場所としてウガンダというのもあるじゃないか、と提案したのですが、大変な事になってしまったんですね。

今まで一致団結していたシオニスト会議が大分裂。賛成派と反対派の真っ二つに割れてしまった。

そして反目が始まったんです。

賛成派はこう言うんです。「一番大事なのはユダヤ人の命でしょ。国造ろうと思っても、ユダヤ人がいなかったらどうやって造るんですか。まずユダヤ人の命を守るために このビッグチャンスを活かすのは当然のことで、これを見送り三振するというのは犯罪だぞ、これは。このウガンダ案を受け入れるべきだ！」

しかし、反対派の意見が、これが強力だったんですね。このウガンダ案に一番反対したのはロシアのユダヤ人代表だったんです。世界で一番迫害されているのはロシアのユダヤ人です。

ロシアには数百万人のユダヤ人がいて、ものすごく酷い目に遭っている。

そのユダヤ人代表が「我々はシオン以外には帰らない！シオン以外の所に行つて、なにがシオニズムだ！」

ヘルツルはそれを見て、このまま行ったらシオニズム運動は分裂し、最終的に消滅するということが分かったんです。自分の提案でとんでもない事が起こっている。それで、第 6 回シオニスト会議は結論出さず、一応現地調査はしましょうということで、どちらの顔も立てて丸く収めて一旦終わります。

結論を言いますと、この話を続けて行ったら分裂崩壊するんで、この話はそつとやめにしたんです。すなわち、ウガンダ案は消滅。それをそつと下ろすことによって、何事もなかったかのように振る舞った。

しかし、この第 6 回シオニスト会議の翌年、ヘルツルは急死します。まだ 44 歳ですよ。

36 歳で『ユダヤ人国家』を書いて、その後世界中の首脳に会い、直談判し、肉体が悲鳴上げてたんですね。8 年間走り続けた。最終的に心臓病で逝ってしまいました。

彼の寿命を縮めたのは、今までの激務ももちろんありますが、やっぱり決定的なのは、彼自身が提案したウガンダ案によって、ユダヤ人の間に大分裂を引き起こしてしまったことへの心痛。これだと思います。

ヘルツルが亡くなって改めて彼の生涯を、生きていた時にどんな成果を挙げることができたかを考えた時、実際的な成果って何もないんですよ。

だって、多くのユダヤ人はシオニズム運動にそっぽ向いて、むしろ反感しか持たなかったんです。

そして、各国首脳と交渉したけど、その結果は具体的成果ゼロ。惨憺たる内容だった。

彼が死んだ後、パレスチナにはいくつかのユダヤ人入植村が出来ていたけど、それは小さな小さな村で、歴史の流れを変えるようなものではなかった。

だから、彼が生きていた時に何か目に見える成果を残したのかというと、「何もなかったね」なんです。

しかしですよ。彼が死んで 13 年後に、誰も予想しなかった事が起こりました。ユダヤ人が入植した開拓村になにかと辛く当たり、踏み潰そうとしていたオスマン帝国が、なんと滅亡消滅してしまったんです。

そして、オスマン帝国を滅ぼした大英帝国が、パレスチナにユダヤ人の国を造るためのアクションを起こし始めます。

イギリス政府がこんな行動を取った要因の1つは、13年前にヘルツルからユダヤ人の情報をたっぴり聞いていたことが大きいんです。ヘルツルがいなければ、彼の活動がなければ、このような歴史の大転換を迎えることはあり得なかった可能性が大きいのです。

『タイム』という雑誌、毎年年末に“今年の顔”を表紙に上げますよね。1999年の年末号、翌年が2000年/ミレニアムという年、タイム誌は特集を組みました。1000年-1999年 この1000年の間に、世界で最も貢献した人100人を選んだのですが、ヘルツルが選ばれていました。「彼がいなければイスラエルは無いだろう。」イスラエルが今在るか無いかで、中東情勢は全然違うんじゃないですか？生きていた時代には無駄死にのように見えたけど、死んだ後で彼は大きな実を結んだのです。

今日は最後に聖書預言をご紹介します。エゼキエル書36章に終末預言が書いてあります。エゼキエル書は今から2600年前に書かれた預言書、旧約聖書の中の1つです。日本で書かれた一番古い本の古事記は、今から1300年前に書かれました。その2倍ですよ。2600年前。

エゼキエル書36章23-26節

神である主のことば。わたし（神である主）はあなたがた（ユダヤ人）を諸国の間から導き出し、すべての国々から集め、あなたがたの地に連れて行く。わたしがきよい水をあなたがたの上に振りかけるそのとき、あなたがたはすべての汚（けが）れからきよくなる。わたしはすべての偶像の汚れからあなたがたをきよめ、あなたがたに新しい心を与え、（あなたがたのうちに）新しい霊を与える。

やがて終末時代、神がユダヤ人を全ての国々から集めて、あなたがたの地/アブラハムに約束した地/エリツ・イスラエルに連れて行く。

これを読んでいたら、最初のシオニストは神だと分かりますよ。シオンに帰ろうと言ってるんですから。しかしね、ここで語られている預言の順番を、よく注意深く考えていただきたいのです。

神はユダヤ人をユダヤ人の地に集めて国を造った**後で**、新しい心と新しい霊をユダヤ人に与える。つまり、国を造った後でユダヤ人はメシアを信じ、メシアを通して神と新しい関係に入る。

ユダヤ人は不信仰の状態で作る。国を造る時 信仰者が造るというよりも、不信仰な状態で世界中から集められ、国が出来た後で、ユダヤ人は信仰的回復を迎えると預言しているのです。

実は、ヘルツルの呼び掛けに従って入植したユダヤ人たちはほとんど社会主義者でした。つまり無神論。その中の1人ベングリオン（彼はイスラエルの初代首相になりますが）は、あるインタビューに「私はシオニストにして無神論者である。」だって社会主義者だから。イスラエルの最初の政権党は労働党です。社会主義の考え方に基いた政党。政治活動政党。

つまり、ユダヤ人は神への信仰がない不信仰の状態で作る世俗国家を造り、その後苦難の中で回心し、悔い改めを与えられ、新しい心を与えられ、そして回復するという預言なんですね。

イスラエルの歴史を細かなところまで調べていくと、聖書預言がいかに詳細に・正確に預言しているのかがよく分かります。それを通して、聖書が神のことばであることを確信することができるのです。そして、神は今も聖書を使ってあなたに語りかける方なのです。

さあ、まだ続くんですね。イスラエル建国までまだまだ続きますねえ。
これから緻密に中東情勢の基礎、現代イスラエル建国に至るまでの経緯をご紹介していきたいと思いますので、よろしければ楽しみにご覧ください。またこのチャンネルでお目にかかりましょう。
それまで皆さん、お元気でいてください。さよなら！

*使用した聖書は『聖書 新改訳 2017』です。